

隠岐丸(初代)

《主要目》貨客船、鉄骨木造船、隠岐国四郡町村連合会所属、132総トン、長さ28.8m、幅4.8m、主機二連成汽機1基、出力32公称馬力、速力8ノット、1878年英国ウエストポイント製鉄所建造、前名速凌丸、原名フローラ・マクドナルド Flora MacDonard

小泉八雲も乗った隠岐航路の創業第1船



写真提供=隠岐汽船

焼火山のご霊火信仰

日本海に浮かぶ隠岐諸島は、島前と島後にわかれている。島前は西ノ島など三つの島からなり、島後には行政の中心地の西郷町がある。ともに、美しい海景や史跡が多い。

隠岐の数ある海景や史跡のなかで、海軍史に関心をもつ私が最も注目しているのは、西ノ島にそびえる焼火（たくひ）の霊山と、その中腹にある焼火神社である。

焼火神社には、中世からご霊火信仰があった。暗夜、しげで航路を見うしなった船が焼火神社の祭神に祈ると、ご神火が海上に現れ、その火をたよりに航行すれば浜辺に帰りつけるといふ信仰である。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）も、隠岐旅行のときに海上からこの霊山を仰ぎ、『伯耆から隠岐へ』のなかでご神火について紹介している。

隠岐の島には現在、隠岐汽船が高速船「レインボー」とフェリー三隻を投入し、密度の濃い定期運航をおこなっている。

じつは、これらの船ぶねと焼火神社の間に、「汽笛一声」と称する興味深いしきたりがあり、今も続いている。それは、隠岐汽船の船が焼火山の沖を通過するとき、焼火神社に向けて汽笛を捧げていることである。

ただし、平成の現在まで続くこの「汽笛一

声」のしきたりは、ご霊火信仰とは関係ない。これは、隠岐航路の創業に由来する伝承である。隠岐汽船の社史『百年の航跡』にも、これについての記述がある。

神主が創業した隠岐航路

隠岐の島じまと本土の境港を汽船で結ぶ定期航路は、今から百十余年前の一八八五（明治十八）年二月に開設された。創業したのは、焼火神社の神主の松浦斌（まつうらさかる）で、当時三十三歳であった。

隠岐国四郡町村連合会の議員をしていた松浦は、開業に際し、隠岐国四郡の公費による汽船購入を連合会に提案した。しかし、連合会の議員の大多数は、船価と運航費のかさむ汽船の投入はリスクが大きすぎるとして、航路の開設そのものに反対。やむなく松浦は、反対する議員をまえに、

「購入汽船の代金の半分は私が負担しますから、隠岐島民の生活航路の大事業をどうか推進していただきたい」と述べ、議場で頭を下げた。

連合会は結局、松浦と折半で百総トン級の汽船を購入し、松浦に十年間経営を委託する妥協案を採択した。営業上の損失も、会と松浦が均等に分担するという条件であった。

開業資金の一万八千五百円は、第三国立銀

行からの借入金でまかなわれた。うち一万六千五百円は汽船の購入費だった。そして松浦は、借入金の約半分の八千九百円に当たる焼火山の神木一万九千本の内訳書を、欠損時の担保として郡役所に差し出したのである。

隠岐航路初の定期船

こうして、隠岐航路初の定期船「速凌丸」（そくりょうまる）すなわち初代「隠岐丸」（隠岐回航後に改名）が、西郷く菱浦（中ノ島）く浦郷（西ノ島）く境港間に就航した。月六航海の定期であった。

「隠岐丸」は、一八七八（明治十一）年に英国で建造された鉄骨木皮構造の小型貨客船である。のちに大阪商船の二代目社長になる河原信可（かわはらのぶよし）が、神戸偕行社の社長時代に英国から買ったもので、隠岐航路開業前年の大阪商船設立時に、偕行社が新会社に参加したことから、大阪商船に提供された。大阪商船時代の同船の航路は、大阪く下関く境港線。「隠岐丸」はすでに、山陰では馴染みの船だったのである。

隠岐航路の島宮時代の一八九二（明治二十五年）年八月には、小泉八雲がセツ夫人をともなって隠岐旅行をしているが、その折にこの「隠岐丸」に乗っている。彼はその前年の秋に、松江中学から熊本第五高等学校に転任

しており、この旅行は、転任後の最初の夏休みを利用したものであった。

創業者に「汽笛一声」

離島航路の経営に困難がともなうのは、昔も今も同様である。創業時代の隠岐航路も、むろん例外ではなかった。

運航は年々損失をかさね、元利償還の穴埋めのため、大木でおおわれていた焼火の霊山は見るかげもなく伐採されて、雑木だけが残る禿山となった。松浦は五年間の苦闘のすえ病にたおれ、三十八歳で他界した。

松浦の死を契機に、隠岐航路は隠岐国四郡町村連合会による島宮時代に入った。さらに、一八九五（明治二十八）年には隠岐汽船株式会社が生。航路は同社に継承され、現在に至っている。

隠岐汽船の「汽笛一声」の伝承は、こうした百十余年まえの史実にちなんでいるわけで、同社の船は今も、焼火山の霊山に眠る松浦に敬意を表して、汽笛を捧げているのである。海事文化のかおりが濃厚にただよっていて、まことに好い情景ではないか。

ちなみに西ノ島の別府港には現在、松浦斌の胸像がある。隠岐汽船の創立百年を記念して、同社が二年前に建てたものである。

（山田 廸生）